

## 教授と二刀流なのです 日建設計構造家・原田公明

朝倉幸子◎TH-1  
illustration:Taco

### ■ 建築の道

1961年鹿児島県の桜島生まれの日建設計シニアエキスパートの構造家・原田公明さん。爽やかで穏やかな雰囲気はいつも変わらない。原田工務店を営む父であったから建築の道へは自然に。県立高校を卒業して進んだ鹿児島大学工学部ではシェルの研究をしていた。…というか実は、勉強は二次でほとんどの時間を端艇部に費やしていたという。ボートには詳しい覇志堂と大いに話が弾む。ボックスとしてクルーに号令を出す役目を担っていたという。原田さんは、自分は力が弱かったからというが、後ろ向きでひたすら漕ぐクルーをゴールへと導く重要な役目である。冷静な統率力とマインドは端艇部熱中時代に培われたものとみえる。大学院は東京の大学と決めていたから、研究室の教授と縁のあった東京都立大学大学院工学研究科へ。構造実験を中心にした耐震壁の設計をして、やっと構造に真剣になったといえます。

### ■ 日建設計で

原田さんは受験者が5名いた中で、コネも実力も何もなかった自分が日建設計に採用されたのは今も不思議なのだという。研修が終わり、最初の担当がわが国初めての本格的DPGガラスファサードを実現した旧日本長期信用銀行本店(1993年)の仕事であった。構造家の竹内徹さんが新日鉄のエンジニアとしてかかわっていた。これが原田さんの構造家人生にとって大きな財産となることを、若い原田さんはふわりと感じていたのかもしれない。もう一人、会社では構造家の小堀徹さんが上司だったのも恵まれていた。さいたま



ーパーアリーナ(2000年)、日建設計東京本社ビル(2003年)などを手始めに日建設計を代表する建物を設計して来られたのです。

2019年には第14回日本構造デザイン賞を受賞した。選考委員長の金田勝徳さんは、代表作として挙げられた3作品(コウヅキキャピタルウエスト、立教大学新座キャンパス新教室棟、武蔵野大学武蔵野キャンパス第一体育館)のいずれも技術的な独自性を持ち、構造設計に対して高い貢献をしたと記している。竹内徹さんは選考委員の立場で、立教大学新座キャンパスは「だまし絵のようなシャープなエッジのRCフレームが印象的で、その手があったかと唸らせられた」といった。さまざまな素材を活かした構造デザインは、原田さんが影響を受けたピーター・ライスの設計思想が生きている。建築家とエンジニアの違いを明確に意識して、革新性を求めて設計しているのが原田公明さんなのです。

### ■ 博士号と教授

3年の月日をかけて博士号を取り、公募があった東京都市大学に応募して特任教授に採用された。建築都市デザイン学部でこれから5年間、研究室を持ち週に2日間は本格的に後進の指導に当たる。日建設計で認められた勤務体制である。

大上段に立って教育方針を語るわけでもなく、淡々と今年度からすでに新しいスタートを切っていると語る。企業構造家として培ってきた技術を、構造設計でもコストも理解できるエンジニアになるよう伝えていきたいし、手計算やアナログで行う構造設計の大切さも伝えたい。「構造の初歩と一緒に学んでいくつもり」と、相変わらずのソフトなお返しが返ってきます。

趣味は?と聞くと、照れながらも身を乗り出して「実はですね、この数年ジャズを唄うのが好きになって」。趣味人の小堀徹さんの愛弟子であり、会長の亀井忠夫さんもサクスの名手なのだから当然かと覇志堂も合点する。お二人と、銀座のジャズライブでの披露を目指して精進中とのこと。